

看護部における摂食・嚥下研究会について

看護部外来 看護副師長 若杉 トヨ子



日本が長寿世界一となり、喜ばしいことですが、その陰には寝たきり老人などの看護・介護を必要とする高齢者が増加していることがいえます。こうした寝たきり状態の高齢者の介護

にあたる場合、食事や排泄などの日常生活行動に対して優先的に時間を要し、外から見えにくい口腔ケアに充分手が回らないのが現状です。これは在宅だけでなく施設・病院においても同様です。口腔が汚染された状態ではおいしいものをおいしく食べられないだけでなく、疾病の悪化や回復の遅延などをも引き起こしてしまいます。

人間らしく口からおいしく食べたいという基本的欲求は病人であろうと、高齢者であろうと同様です。こうした寝たきり状態の高齢者や病人に出会う機会の多い看護師は、口腔ケアの必要性は充分に感じています。しかし、今までは時間や人員の不足・多忙等で口腔までケアが行き届かなかったのではないのでしょうか。「健康は口から」をモットーに理想だけでなく、現実的なものとして実践

していくには看護師の口腔に関する関心度・知識・職務の責任感・看護力が大きく影響するといわれています。

当病院の看護部もその必要性を理解していながらも業務におわれ、指導や実践の機会が少ないことから技術に関しても自信を持てず、十分に嚥下訓練や口腔ケアを行えない状況に対し、ジレンマを感じていました。そこで数年前から摂食・嚥下、口腔ケアについて希望者を募り、学習会を行ってきました。今年度からは看護部長発案の基、今まで学んだ知識・技術を徐々に看護部全体に伝達し、より高い技術をスタッフ全員が身につけることを目標として、安全で効率的に行える摂食介助・嚥下訓練の実践活動を開始しました。

現在は毎週一回の割合で加齢歯科の歯科医師と一緒に新潟市内の特別養護老人ホームを訪問し、多発性脳梗塞、老人性痴呆等の基礎疾患を有する患者さんの食事介助・口腔ケアを行っています。経管栄養を行っている寝たきりの患者さんの中には、意識レベルが低下しており、傾眠状態の患者さんもありますが、声をかけて、スポンジブラシを唇に当てることで反応し、口を開けて声を上げて



くれます。口腔ケア後、緑茶ゼリーで嚥下訓練を行い、最後に充分吸引して終了ですが、スムーズに嚥下してくれる時といくら声かけしても飲み込んでくれない時とその日の状態によって違います。これは経口からの食事介助を行っている患者さんも同様です。しかし、回数を重ね患者さんを理解してきたことでコツをつかめるようになりました。

こうしたことは概念だけで理解はできても、患

者さんに対し実施してみなければ実感も湧かないし、技術の向上も見込めません。

これからの高齢化社会、高齢者が健康で口からおいしく食べ続けるには、口腔にたずさわる我々医療者の役割は大きく、期待されていると思います。しかし、口腔のみにとらわれず、患者さんに対しては、寝たきりであろうと、痴呆であろうと全人的にかかわれる医療者であり続けたいと思います。

